

昭和六十一年六月二十二日郷土研究会資料

第一四五回

史跡めぐり資料

豊嶋氏の遺跡を訪ねて

長命寺

道場寺

三宝寺

石神井城址

三宝寺池

越谷市郷土研究会

山田政信

第一四五回史跡めぐり案内

とき 昭和六十二年六月二十二日(日)
集合 南越谷駅前 午前八時四十五分
行先 練馬区 石神井城址附近

コース 南越谷駅 新秋津駅 秋津駅

石神井公園駅 長命寺 三宝寺 昼食(三宝寺内)

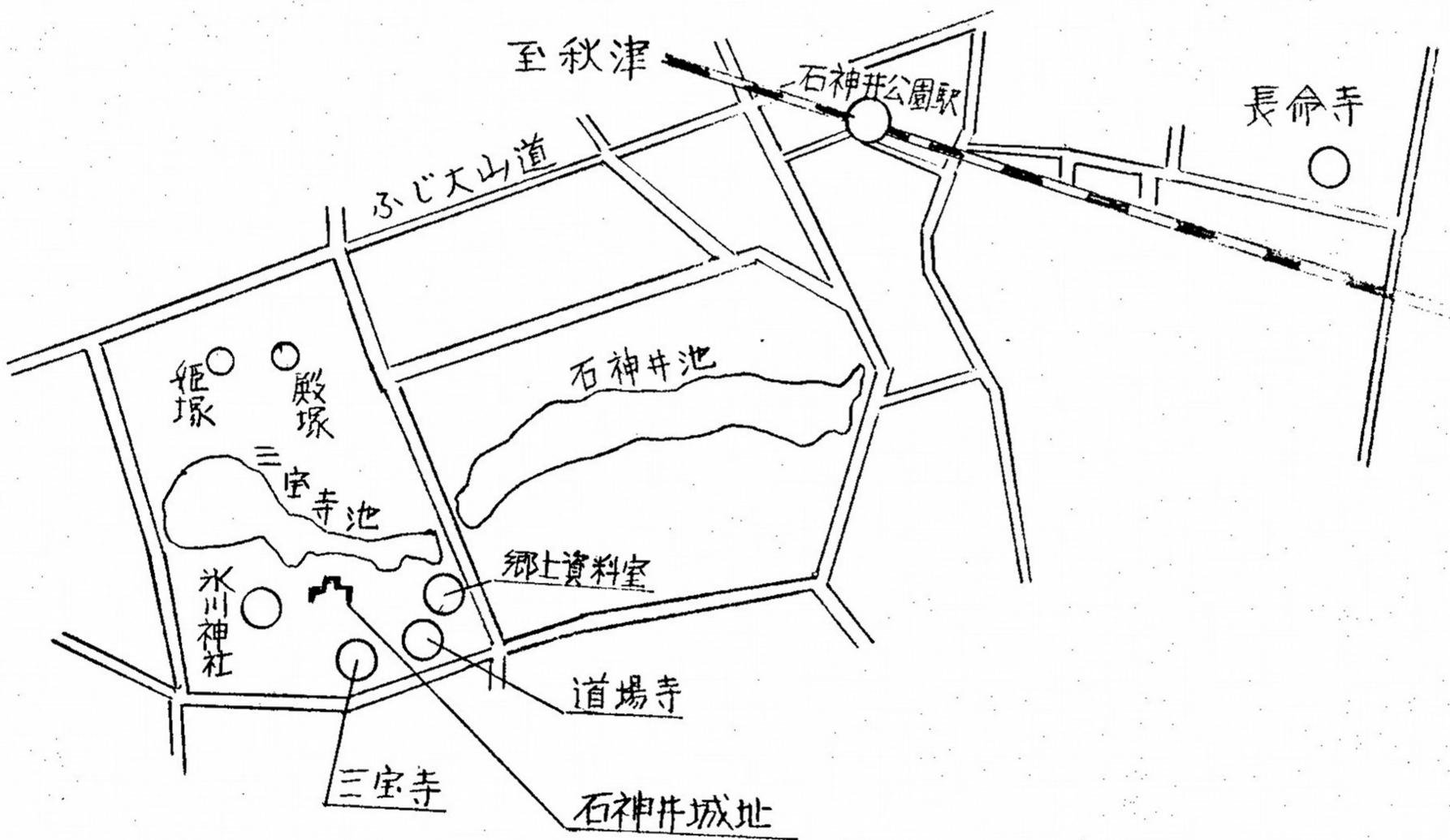
道場寺 郷土資料室 氷川神社 石神井城址 三宝寺池

石神井公園駅 秋津駅 新秋津駅 南越谷駅(解散)

案内 山田政信

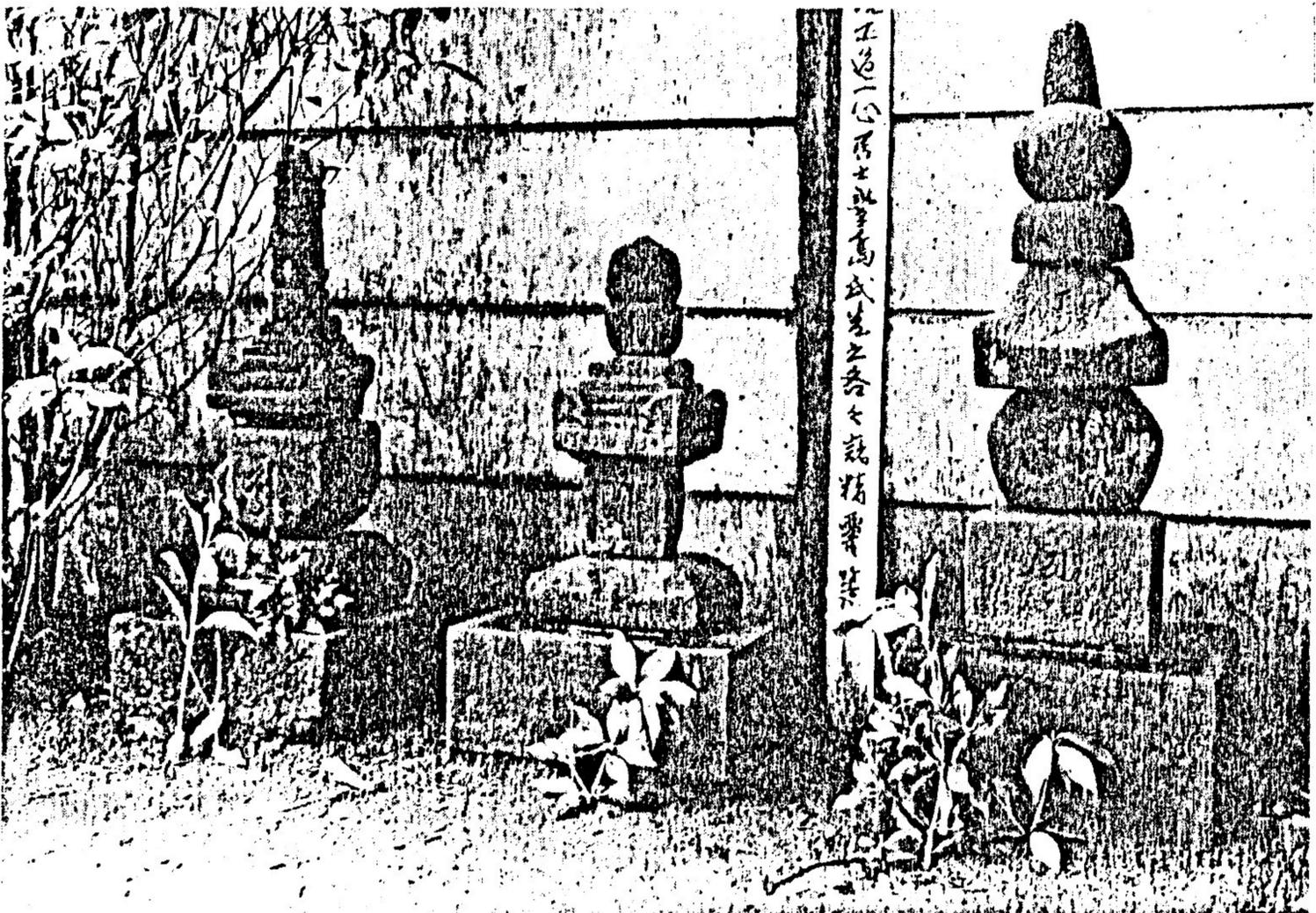
主催

越谷市郷土研究会





石神井城碑—練馬区石神井公園—



豊嶋一族の墓(道場寺)—練馬区石神井台一丁目—

長命寺

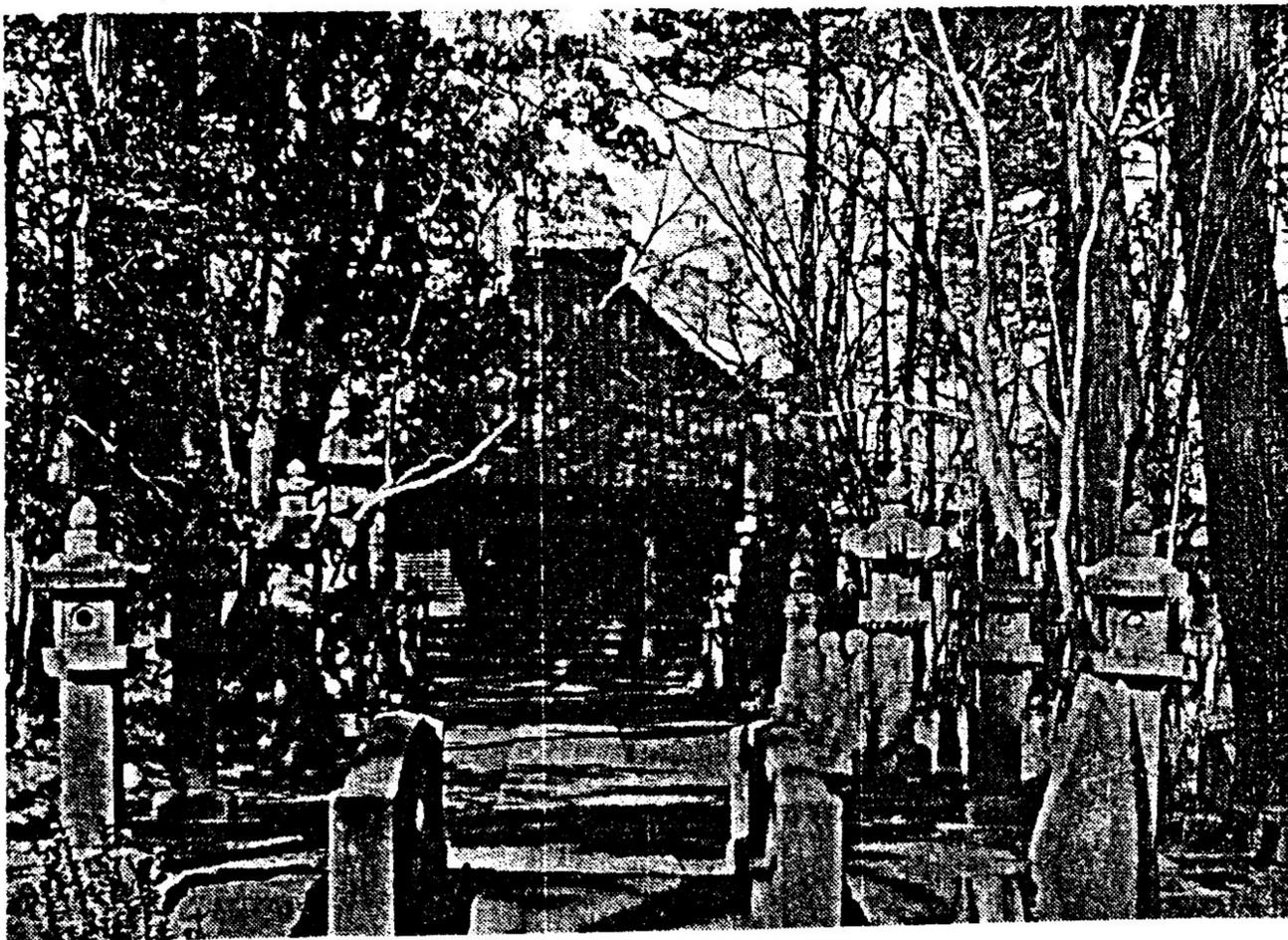
新編武蔵風土記稿に「……境内大師堂ノ縁起ニ拠ニ増嶋勘解由重明ナルモノ当村ニ住シ仏心深ク兄重因カ弟四子重俊ニ家ヲ譲リ剃髮染衣シテ慶算ト号シ紀伊国高野山ニ登リ木食勤行スルコト年アリ或日大師ノ夢想ニ因テ讚岐国弥谷寺ニ至リ師自作ノ木像ヲ感得シ速ニ当村ニ歸リ高野山ニ擬シテ一院ヲ営ムカノ像ヲ安置ス今ノ大師堂是也」これに「これが当寺の草創で、寺記によれば慶長一八年（一六一三）とある。さうに寺記によると、寛永一七年（一六四〇）増嶋重俊は重明の志を継ぎ金堂（観音堂）を建てこれを大和初瀬の長谷寺小池坊の僧正秀算が「谷原山妙楽院長命寺」と号し、一寺とした。本尊は長谷寺本尊の十一面觀世音菩薩を模した像と造つて金堂に安置したとある。これが長命寺の本尊である。幕府よりは「慶安元年（一六四八）観音堂領九石五斗、御朱印ヲ賜ハレリ」と風土記稿に記されている。

大師堂を中心とした奥の院の規模は重俊が重明の志を継いでつくられたもので、江戸名所図会には「……この奥の院は、すべて紀州高野山大師入定の地勢を模擬する故に、堂前に万灯堂あり。又御廟の橋、蛇柳は前庭にありて、左右に七観音、六地藏の石像、その他石灯籠、五輪の石塔婆、並びに増嶋氏累世の墳墓等並び建てり、又御堂の四隅には五重の宝塔立ちて、十三仏、十五の石像等の類々累々として野山の規制に

なろうしこいちはいずれも現存し霊場としての結構をつくしている。このように紀州高野山を模してつくられたので、世に東高野または新高野といわれてきた。しかし万治元年（一六五八）火災にかかり堂宇ことごとく烏有に帰した。当時増嶋重辰（重俊の子）が寛文年間より元禄年間にかけて再建した。さらに明治三十年に再度火災にあい、本堂、庫裡、長屋門が焼けたが同三十七年本堂再建し、さらに昭和四十五年、五十四年に大改修を加え、五十六年には本堂正面に南大門が建設された。

増嶋氏の代寺として創建された当時は、御府内八十八ヶ所第十七番霊場として厚く庶民の信仰を得、享保頃より参詣寺として隆盛を極めた。「東高野山みち」「長命寺みち」の道しるべがその面影を今日に残している。とくに芝居関係者の信仰を集め、文化年間に中村座主奉納の鳥居清長の芝居絵額（都重臣文化財）などはその名残といえる。

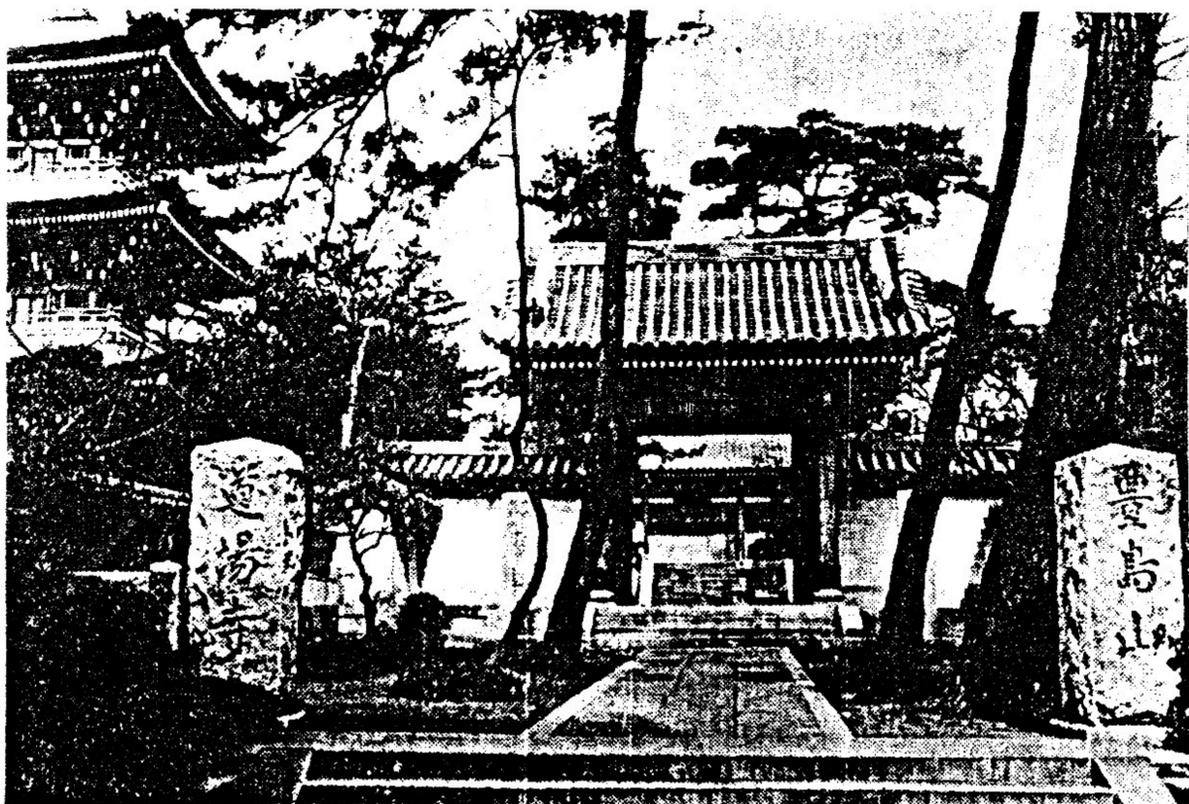
毎年四月二十一日の開帳には花嫁市が開かれていたが、今日では植木市がさかんである。



道場寺

新編武蔵風土記稿に「道場寺、禪宗曹洞派荏原郡世田ヶ谷村勝光院末豊嶋山無量院ト称ス本尊阿弥陀又行基ノ作ノ薬師ヲ安ス元ハ別堂ニアリシモノナリ当寺ハ石神井城主豊嶋左近太夫景村ノ養子豊島兵部大輔輝時応安五年四月十日此地ニオヒテ菩提寺ヲ起立シ豊嶋山道場寺ト号シ僧大岳ヲ延テ開山トシ練馬郷ノ内六十二貫五百文ノ地ヲ寄附ス其頃ハ濟家ナリト云輝時ハ北条高時ノ子相模次郎時行ノ長子ナリ其家滅亡後景村養ヒテ豊嶋ノ家ヲ継シメシトナリ事ハ過去帳ニ詳ナリ輝時永和元年七月七日卒ス勇明院正道一心ト謚ス……」とある。

道場寺由緒によれば「抑も住古当山は、聖武天平（七二九）の開創にして、本尊には行基菩薩作阿弥陀如来の尊像を安置せりと伝ふ。……さ此ど豊嶋代は文明九年（一四七七）大田道灌の軍配に敗れ諸堂烏有に飯す。其後北条氏康よ



リ永禄五年四月（一五六二）寅朱印を拝領し山門再び興隆せるも北条の威振はず戦国乱世となり寺堂古記概ね消滅し法灯將に絶へんとするや徳翁和尚は、勝光院二世観堂禪師を招して再建して中興せり。時に慶長三年（一五九八）なり。幸い寅朱印及び過去帳の一部がその厄をのがれ現存せり。現在は曹洞宗に属し本尊には釈迦牟尼仏側侍薬師如来聖観音を奉安す。

寅朱印は寺堂でつぎのように記されている。「武州石神井之内弘徳院門派道場寺分之事如前々可為不入候。段銭懸銭以下一切令免除者也。仍状如件永禄五年戊午四月



廿一日禅居菴」北条氏が禅居菴にあてて、道場寺分の土地に段銭懸銭などの附加税をいつさい取らないことを申し渡したものである。

境内には豊嶋泰経及び一族の墓と称する三基の石塔・練馬最古の青石塔婆などがある。

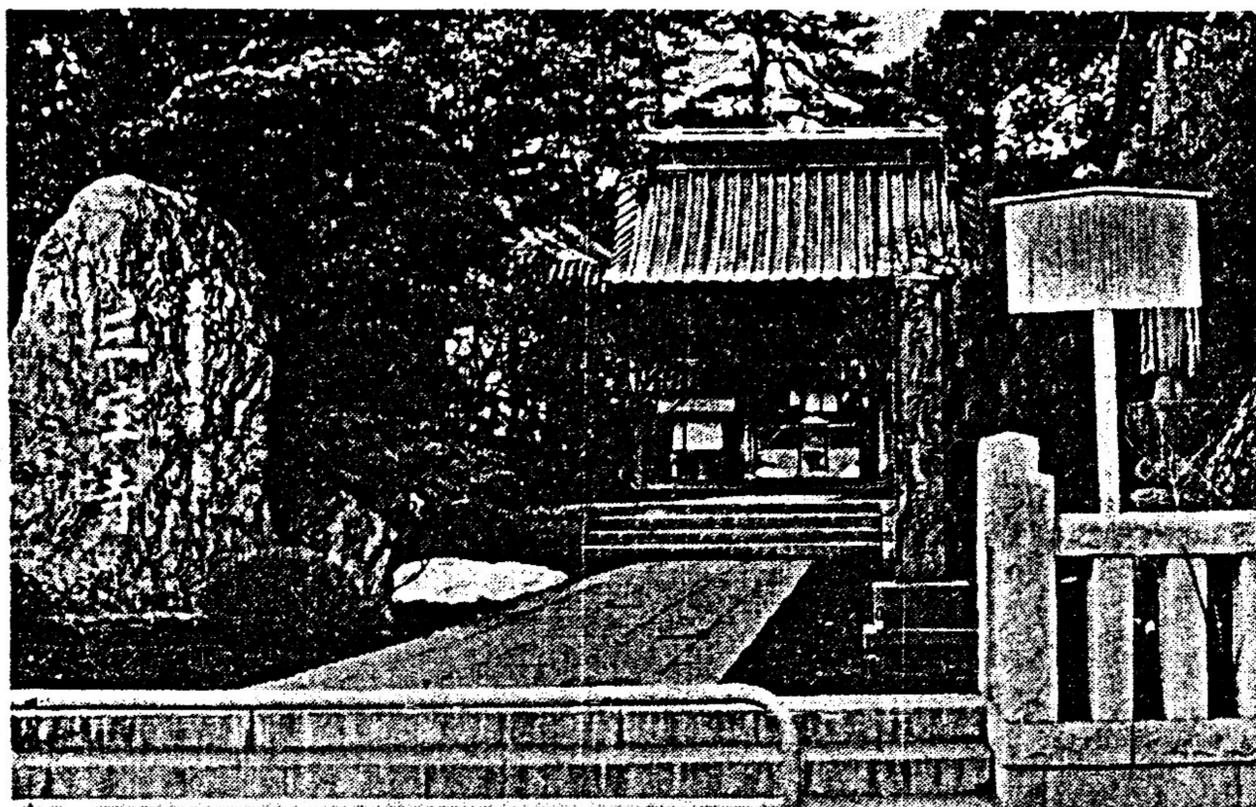
現在の堂宇は昭和十二年改築され、その後更に唐招提寺の金堂を模して改築した。昭和四五年から五十年にかけて山門と鐘楼及び三重塔が新築された。三重塔の金銅薬師如来台座にはスリランカ国より拝受の仏舍利も奉安されている。

三宝寺

新編武蔵風土記稿に「三宝寺 新義真言宗龜頂山密乘院ト号ス……寺伝ヲ閱スルニ当寺ハ応永元年権大僧都幸尊下石神井村ニ草創スル所ニシテ同キ五年三月九日寂ス後屢戦争ノ災ニ罹テ頗衰タリシニ文明九年太田道灌豊島氏ヲ滅セシ後ソノ城跡ヘ当寺ヲ移セリト云カカル旧刹ナリシカハ天文十六年元ノ如ク勅願所タルヘキノ免状ヲ賜ヒ永祿十年現住尊海ヲ大僧正ニ任セラル又北条氏ヨリモ寺田ヲ寄附シ制札等ヲ与ヘテ帰依浅カラサリシカハ御当代ニ至リテモ先規ニ任セラレ大正十九年寺十石ノ御朱印ヲ賜ハレリ寛永二年正保元年大猷院殿御放鷹ノ序当寺ヘ御立寄アリ例歳二月十五日三月二十一日ノ二度ニ常楽会ヲ執行ス近郷ノ末寺配役シテ是ヲ勤ムト云」とある

三宝寺縁起ニ「西紀一千三百九十四年、後小松天皇の応永元年の草創である。鎌倉大楽寺の大徳、権大僧都幸尊法印は、仏縁の地を求めて巡錫し来り、武蔵豊島郡石神井郷小仲原の地が、石神井川の清流を前にし、三宝寺川の谷を後にする、靈龜状丘陵の頂点たる景勝を嘉し、此所に真言の道場として一字の淨舎を建立した。龜頂の山号及び密乘の院号の由来するところ、実にこれに因るのである」とある。

当寺には幾多の文書記録が蔵されていたが、境域はしばしば兵火に罹り、さらに、文久三年と明治七年の二回火災に遭ったので、その際多くの什宝記録の類は烏有に帰



した。しかし、その文書の一部は新編武蔵風土記稿に記載されており、また、古文書の写や江戸時代の文書記録などは数多く伝えられ寺誌に記載されている。当寺の寺宝は、木彫の紅顔梨阿弥陀仏（製作年代不詳）や来迎三尊仏画像板碑（文明四年銘）など。鐘樓の梵鐘は、延宝三年の銘があり、江戸増上寺の大鐘を銕た時、その余銅をもって造ったと伝えている。山門は御成門と呼ばれ、現在の門は文政十年に成り、当寺第一の古建築である。門前に「守護使不入」の禁制石がある。御成門の東にある長屋門はもと勝海舟邸にあつた由緒ある門で、区内旭町免月園に移されていたものを、徳川氏縁の当寺が幕末の重臣勝海舟を慕い昭和三五年移築したものである。境域には多くの石造物・碑があり、大師堂の周囲に四国八十八ヶ所お砂踏霊場があります。

石神井城址

新編武蔵風土記稿に「村ノ東ノ方氷川社及三宝寺境内ノ辺是ナリ廣サ東西六十七丁南北三丁許太田豊嶋兩系譜及三宝寺縁起等ヲ閲スルニ豊嶋權守清光カ子ヲ右馬允朝經ト云朝經カ四代ノ孫ヲ三郎兵衛泰景ト称ス是當城ノ主夕リ泰景卒シ其子朝泰幼ナリシカハ泰景ノ弟左近太夫景村元弘年中遺跡ヲ繼在城シテ朝泰ヲ守立成長ノ後所領ヲ返シ當城ヲ讓レリ朝泰カ八代ノ孫ヲ勘解由左衛門泰經ト称ス文明九年四月泰經弟平左衛門泰明ト長尾景春ニ一味シ管領上杉修理太夫定正ニ背キ江戸河越ノ通路ヲ塞キケルニヨリ太田道灌江戸ヨリ打テ出平左衛門カ平塚ノ城ヲ取巻城外ヲ放火シ手痛ク攻ケルエヘ泰經平塚ヲ救ワシ爲當城ヲ出テ多摩郡江古田沼袋ニ於テ道灌ト接戦シ泰經泰明敗績シテ一族ミテ戦死シ殘兵力ツキテ同十八日城遂ニ陷レリ……今城地ノ様ヲ見ルニ山城ト云程ニハアラサレト自然地高ニテ前ハカノ三宝寺池ニ瀉ミ廻リニ堀アリテコノ池水ヲ引沃カンニハ堅固ノ城郭トナルヘシ槽ノアリシ跡ニヤ所マニ築山殘レリ此ヨリ北ノ方ニ城山ト唱フル地アリ道灌當城ヲ攻シ時ココニ砦ヲ築キ軍卒ヲ置シ所ト云尚平塚城跡豊島村等併セ考ヘシトある。

石神井城址は、その位置を見るに、南は石神井川の低地、北は三宝寺池の谷、その間にはさまつて、西から東へ舌状をした幅の狭い丘陵の上である。北の三宝寺池の方



は、十メートルぐらいの断崖をなし、南の方、石神井川の谷は緩傾斜であるが、現在田や石神井小学校運動場になつてゐる所も、もとは沼沢地であつたから、城濠の役目を十分に果して、自然の要害となつてゐた。それゆゑ、東西の方面だけを、人工で防禦施設とすればよかつた。そのために構築された空濠と土圍は、今も一部ながら、なお残つており、往時の形勢をしのばせるものがある。

この石神井城は、鎌倉時代末期に築造され、南北朝時代を経て、室町時代まで存続したのである。この時代の城郭の特徴は、地方に興つた武士豪族が自己の開拓した土地を自己の手で守るために築城したのであるから、まづたく私的なものであつた。その居館も、後世の大名のものとは、較べものにならないほど、簡素なものであつた。石神井・練馬及び平塚城は、いずれも武蔵野の中にあるので、平城で、平時の居館として、交通や産業の便がよく、また丘陵によつて塁を築き、自然と人工の濠を利用して、山城の戦術上の利点とある程度確保することができた、いわゆる平山城としての価値を持ったものである。

関東の争乱と石神井城落城

応永より文明に至る八十余年に、関東は、上杉禪秀の乱・永享の乱・享徳の乱および長尾景春の反乱と、争乱の連続であつた。

この間の豊嶋宗家の歴代は、¹³範泰——¹⁴朝泰——¹⁵泰景——¹⁶泰儀——¹⁷宜泰——¹⁸経祐——¹⁹泰経の七代で、その多くは、勘解由左衛門尉と名乗っていた。この勘解由左衛門尉家の宗家に対して、参河守と名乗る範泰の弟の泰秀の系下の人々がいた。それは、泰秀——泰長——泰次——経泰——泰程らである。

この勘解由左衛門尉家と参河守家の豊嶋家の人々は、足利持氏の存命中は、持氏および山内憲基方に参集し、享徳の乱では、足利成氏の軍勢催促を受けたが、のうちには山内房顕と顕定に味方している。山内房顕は、文正元年（一四六六）二月武蔵五十子の陣中で戦死した。房顕の跡をついだのが、越後の上杉房定の子の顕定である。

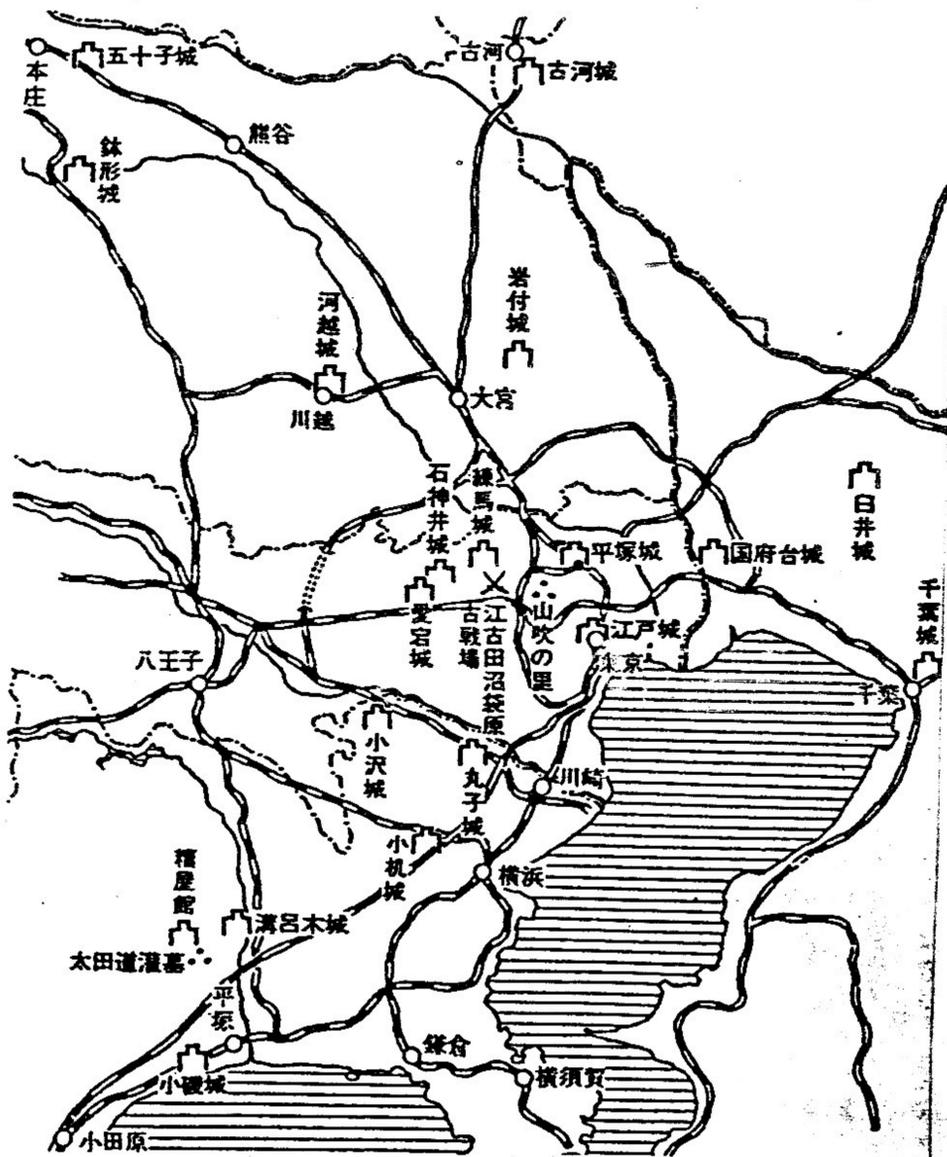
山内上杉家では、その家宰の長尾景信が、文明五年（一四七三）六月、五十子陣中で没した。景信の嫡子の景春をさしおいて、景信の跡と、景信の弟の忠景をして継承せしめた。嫡子の景春は、この顕定の措置と不満として、反乱に立ちあがつたのである。いねゆる、景春の反乱であり、豊嶋泰経・泰明の兄弟は、この景春に与党して山内顕定および扇谷定正に背き、ついに文明九年（一四七七）四月、扇谷定正の家宰の

太田道灌によつて、豊嶋氏の本拠の平塚城（豊島城）を攻められた。そして四月十四日には、太田道灌・三浦義同・千葉自胤らの軍勢と、江古田原沼袋で会戦し、泰経は弟の泰経以下、板橋・赤塚の一族百五十名を失なつた。

兄の泰経は、石神井城に逃げたが、ここも道灌に攻められ、四月十八日には、要害を崩すという条件で和平交渉に応じたが、泰経が、それを実行しないので、道灌は、ついに四月二十八日（三十一日ともみえる）、石神井城の外城を攻めたので、城兵は、夜にまぎれて敗走したという（「太田道灌状」）。これが石神井落城といわれているものである。

石神井落城後、泰経は、生きのびてまた平塚城に拠つていた。しかし文明十年正月二十五日（一四七八）、道灌は、また平塚城を攻めたので、泰経は、小机城に敗走した。その後、泰経はどうなつたのか、諸書は、これを明らかにしていない。

以上が、平野実先生の明らかにされ



た関東争乱期における豊嶋宗家の活躍と石神井落城の大要であるが、石神井落城の日時や、泰経の行方など、確定することはできないのである。

豊嶋泰経・泰明兄弟は、なぜ景春に与し、両上杉に反抗したのであるうか。それは太田氏に対する反感からであろうと思はれる。「別本太田系図」によると、元享のころ、相模国に太田資益という人がいた。資益の子の資通は、足利基氏に仕え、父の遺領の武蔵国小机・稲毛・広沢・岩淵・志村・中野などを賜わったと伝えている。

豊嶋宗朝が、実父の宮城為業から、宮城氏の所領の去渡を受けたころのことである。これらの地域には、豊嶋氏の所領が、多くふくまれていたと考えられる。以後道灌の時代までに、太田氏は、豊嶋氏の旧領を、相当に侵食したのではあるまいか。これが、豊嶋泰経・泰明兄弟が、前代の主君の山内顕定や扇谷定正に反して、景春党にくみした理由であろう。

宗家の没落にもかかわらず、豊嶋庶流は、城北・城西に、着実に伸展していった。

氷川神社

本社は石神井郷の総鎮守にして、谷原・田中・上石神井・下石神井・関の五ヶ村よ

り篤い崇敬をうけてきた。今日なお「石神井の氷川さま」と尊称されてある。

社伝によれば、応永年間、豊嶋氏が、大宮なる武蔵国の一ノ宮氷川神社の御分霊と石神井城内に奉斎したのに創まるという。而して、文明九年四月十八日、石神井城が太田道灌によつて攻略され廢城となるや、土着民の鎮守神と仰がれてきた。

江戸時代になつても、豊嶋氏の子孫が崇敬したものとごとく、本殿と拜殿の間に、一対の石灯籠が奉獻されており、その杆石には「願主豊嶋七兵衛泰盈敬白元禄十二年乙卯歲吉祥日」の文字が刻まれている。

三宝寺池の金鞍伝説

最後の拠点石神井の城も、太田道灌に包圍され、ついに破れて、城主豊嶋勘解由左衛門尉泰経、「今はこれまで」と、雪とあざむく白馬に、重代の家宝の黄金の鞍を置いてこれに跨がり、三宝寺池の水底深く沈んだ。この日以来、金の鞍は今も池の底にあつて、晴天の日に、照日の松の梢に登れば、燦然と輝くのを、見ることができると伝説はいう。しかし、その照日の松も、今は枯れてしまった。

殿塚

三宝寺池の北岸にある。ここに豊嶋泰経の遺骸を葬ったといっているので、この名がある。

姫塚

殿塚の西方に並ぶ小墳丘で、上に小さな祠がある。泰経の長女の照姫が、石神井城落城の時、父の後を追って入水したので、その骸を埋葬した。そのゆえこの名がつけられたという。

別伝によると、三宝寺の住職の定宿が、京へ上って、「月はなし日とそのままの今宵かな」という発句を作って、叡感に預かり、照日上人の名を賜わったが、その上人の墓なので、照日塚といつたという。

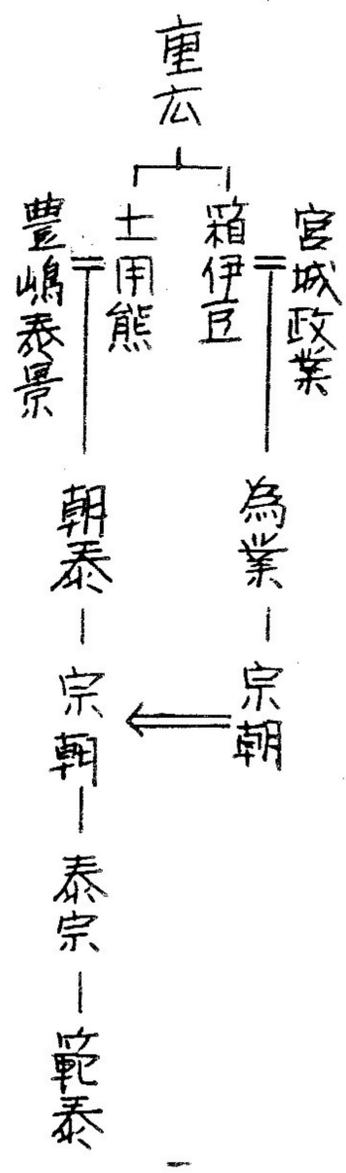
豊嶋氏の石神井郷進出

1、宇多左衛門大夫重広に、箱伊豆と土用熊の二人の娘があつた。箱伊豆は宮城六郎政業に嫁し、土用熊は豊嶋三郎泰景に嫁した。

2、重広は、弘安五年（一一八三）十二月十日、箱伊豆に石神井郷などの所領を譲る。

- 3、箱伊豆は宮城右衛門為業を生み、土用熊は豊嶋孫四郎朝泰を生んだ。
- 4、豊嶋朝泰に子がなかつたので、宮城為業の子の宗朝を養子として豊嶋家を継承せしめた。
- 5、宮城為業が、宮城氏の所領の確認と足利尊氏よりえたのは、貞和五年（一四三九）三月十四日のことであり、その所領を宗朝に去り渡したのは、同年十一月十二日である。

6、宗朝から泰宗への所領の譲与は応永二年（一三九五）八月二十一日に行なわれた。



参考図書

豊嶋氏の研究 杉山博編 名著出版
 練馬の寺院 練馬区教育委員会

文珠菩薩 長命寺



釈迦如来 長命寺



不動明王 長命寺



長命寺石仏(十三仏)

薬師如来 長命寺



弥勒菩薩 長命寺



普賢菩薩 長命寺



「練馬ノ石仏」ヨリ

除地蔵菩薩、観音菩薩

阿弥陀如来 長命寺



勢至菩薩 長命寺



虚空蔵菩薩 長命寺



大日如来(金剛界) 長命寺

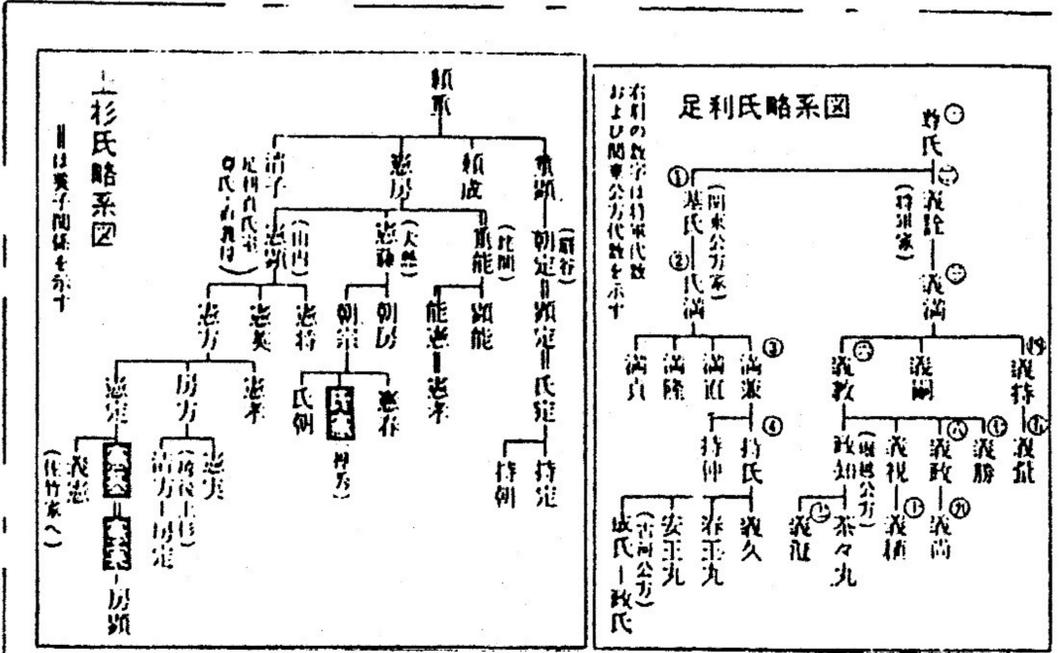


阿閼如来 長命寺



十王・十三仏配当表

		十三仏	忌日(法事)
十王	泰初宋五閻変	不動文普地弥聚	初七日 二七日 三七日 四七日 五七日 六七日 七七日 百力日 一年 三年
	廣江帝官魔成	明如善菩薩 動迦殊賢地	
	王王王王王王	王米薩薩薩 如善善善 善善善善	
	山府君王王王	米薩薩米 如善善善	
	平等王王王	如善善善 如善善善	
	都道輪王	米薩薩米 如善善善	
	五道輪王	阿彌陀如米	
	王王王	諸説アリ	
	上王王	阿闍如米 大日如米 虚空藏菩薩	七年 十三年 三十三年
	王王王	王王王	



関東争乱(応永の文明)概要

禅秀ノ乱
 応永三十三年 (二四二六)
 代憲、管領辞任、持氏ト不和、鎌倉転覆ノ陰謀ヲ計ル
 ○ 足利持氏 …… 上杉憲基、江戸氏、豊島氏
 × 上杉代憲 …… 足利満隆、丹党、見玉党 (持氏、叔父)
 ○ 足利持氏 …… 上杉憲基、江戸氏、豊島氏

永享ノ乱
 永享十年 (二四三八)
 足利義持ノ死後、持氏、將軍ヲ望ミ、室町幕府ト對抗
 ○ 上杉憲実
 × 足利持氏

結城ノ乱
 永享十二年 (二四四〇)
 持氏ノ遺子ヲ奉シ、鎌倉ヲ復興ヲ志シテ兵ヲ起ス
 ○ 上杉清方 …… 上杉持朝、豊島
 × 結城代朝 …… 春王、安王

宝徳元年
 (二四四七)
 足利成氏(持氏ノ子)永再王、関東公方トナル

享徳ノ乱
 享徳四年 (二四五五)
 成氏遺恨ヲモツテ、憲思ヲ謀殺ス
 ○ 上杉房頭 …… 上杉憲顕、上杉持朝
 × 足利成氏 …… 今川範忠
 ○ 足利成氏 …… 古河三季、古河公方トナル

景春ノ反乱
 文明九年 (二四七七)
 長尾景信ノ死後、景春ハ跡目相継ノ不満カラ、山内顯定ニ背イテ、鉢形城ニ拠ッテ兵ヲ擧ゲ、山内顯定、大田道灌、千葉自胤、扇谷定正、江戸田原、沼袋合戦、長尾景春 …… 豊島泰経、泰明